

令和8年(2026年)4月15日

開館40周年記念展覧会
シリーズ **THE DAIMYO**

特別公開 「井伊家の名宝 国宝 彦根屏風」 を開催します



このたび、彦根城博物館において、みだしの企画を行いますのでお知らせします。つきましては、広報方についてよろしくご高配のほどお願い申し上げます。

記

1 名 称

開館40周年記念展覧会 シリーズ THE DAIMYO
特別公開「国宝・彦根屏風」

2 会 期

令和8年(2026年)4月23日(木)～5月11日(月) 会期中無休
開館時間：午前8時30分～午後5時(入館は午後4時30分まで)

3 会 場

彦根城博物館 展示室1

4 展示の趣旨

当館所蔵の風俗図(彦根屏風)は、近世初期風俗画の傑作として高く評価され、国宝に指定されています。「彦根屏風」の名は、代々彦根藩主であった井伊家に伝来したことによる命名で、一般に広くこの名で知られています。近年、井伊家12代の直亮(1794-1850)が購入したことが明らかになりました。

この屏風の制作は、江戸時代初期の寛永年間(1624-44)頃と考えられており、舞台は、当時の京の遊里と推定されています。各人物は、屏風の山折りと谷折りの形態を活かし、それぞれが緊密な対応関係にあり、そのさまざまな姿態とともに、計算し尽くした完成度の高い構図がとられています。また、人物の髪や衣装の文様等、線描と賦彩は精緻を極め、器物や衣装の質感までもが表現され、生々しいまでの印象を与えます。そして、三味線、双六、恋文、画中画の屏風絵は、漢画の伝統的画題である琴棋書画の見立てと解され、屏風絵は室町時代の本格的な漢画の技法で描かれるなど、単純な風俗画を超えた、重層的な

要素が随所に盛り込まれています。勿論、^{こそで からわまげ}小袖や唐輪髻などの装いや種々の遊びなど、江戸時代初期の風俗をリアルに表現する点でも高く評価されています。

このように、多様な魅力を持つ屏風ですが、画中に^{らっかん}落款はなく、作者は特定されるに至っていません。現在は、卓越した素養と手腕を持つ^{かのう}狩野派の絵師の手になると考えられています。

当館は、令和9年(2027)2月11日に開館40周年を迎え、これを記念し、約1年にわたり、全9回にわたる展覧会「シリーズ THE DAIMYO」を開催します。本展はその巻頭を飾る展覧会です。井伊家伝来の数々の名宝を代表する彦根屏風の魅力を堪能していただきます。

5 展示作品

名称	数量	寸法	制作年代	所蔵
風俗図(彦根屏風)	6曲1隻	縦94.0cm 横271.0cm	江戸時代前期	当館

6 観覧料

一 般 700円

小・中学生 350円

*30名以上の団体割引等あり

**常設展「“ほんもの”との出会い」も併せてご覧いただけます。

7 関連事業

展示解説(スライドトーク)

と き：令和8年(2026年)4月25日(土)

午後2時～(開場は午後1時30分～)*30分程度

ところ：彦根城博物館 講堂 *講堂で解説後、展示室で自由観覧

定 員：50名(当日先着順)

参加費：無料

*展示室の入室には、別途観覧料が必要です。

担 当：当館学芸員 ^{たかきふみえ}高木文恵

問い合わせ先

彦根市教育委員会事務局

彦根城博物館 学芸史料課

担当：高木文恵

電話：0749-22-6100

FAX：0749-22-6520

E-mail：museum@mx.hikone.ed.jp

■ 彦根屏風 履歴 ■

時代		事項
江戸時代 寛永年間頃	1624-44	この頃、制作される 作者・発注者は不明
江戸時代 後期	19世紀	彦根藩井伊家12代直亮 <small>なおあき</small> (1794-1850)が購入する
大正12年	1923	関東大震災での焼失を免れる
昭和8年	1933	重要美術品に認定される
昭和27年	1952	重要文化財に指定される
昭和30年	1955	国宝に指定される 指定名称は「紙本金地著色風俗図（彦根屏風）」
平成9年	1997	彦根市が取得、彦根城博物館の保管となる *夏原平次郎氏をはじめ、彦根市民など多くの人からの寄附金をもとに彦根市が購入 これより後、例年1回1ヶ月間、博物館で公開する
平成18～19年	2006-7	保存修理をおこなう 本来の屏風装に戻す 経年の傷みを修復する *購入時の寄附金をもとに彦根市が修復 東京文化財研究所と共同研究で科学的調査をおこなう
平成19年	2007	修理後、初公開（彦根城築城400年記念特別企画展）
平成20年	2008	調査および修理の報告書刊行



作品解説

ふうぞくず ひこねびょうぶ
風俗図(彦根屏風) 6曲1隻

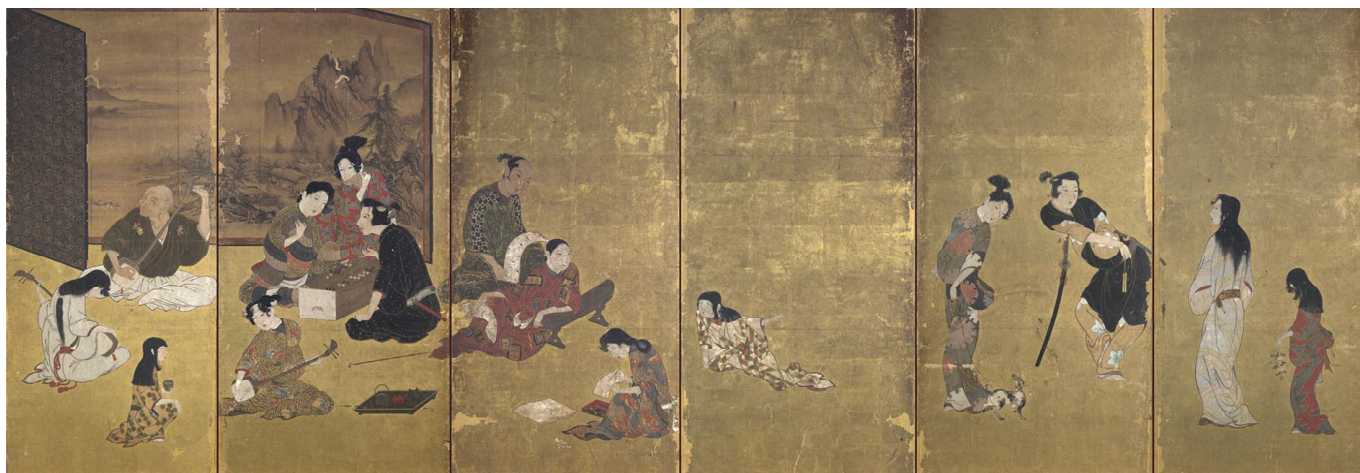
国宝

本紙(絵が描かれている部分): 縦94.0cm 横271.0cm

江戸時代 寛永年間(1624-44)頃

当館蔵

*彦根屏風の概要については、別添リーフレット「国宝 彦根屏風」をご覧ください。



National Treasure
"Hikone Screen"

国
宝

彦根屏風

ひこねびんぷう



● 彦根屏風の公開 ●

彦根城博物館では、原則的に、毎年ゴールデンウィークを含めた4～5月の期間の中で彦根屏風を公開しています。



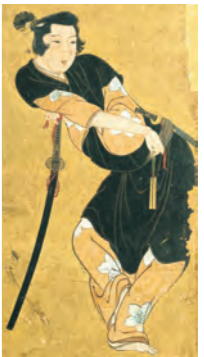
滋賀県彦根市金亀町1番1号 TEL 0749-22-6100

彦根城
博物館
Hikone Castle Museum

「彦根屏風」という名

「彦根屏風」は、代々彦根藩主であった井伊家に伝来したことからこの名があります。注文主は分かりませんが、近年、江戸時代後期に井伊家十二代直亮（二七九四〜一八五〇）が購入したことが明らかにになりました。現在は彦根市の所有となっています。

国宝の指定名称は「紙本金地著色風俗図」ですが、一般にこの「彦根屏風」の名で広く親しまれています。



近年、江戸時代後期に井伊家十二代直亮（二七九四〜一八五〇）が購入したことが明らかにになりました。

風俗図

室町時代の終りから江戸時代の前期にかけて、のちに「近世初期風俗図」と称される風俗図が大



この金地を背景に、きわめて洗練された感覚で、人物が緊密に配置されています。このような金の効果は、有名な徳屋宗達の風神雷神図屏風（国宝、京都・建仁寺蔵）など、寛永年間頃の作品に通ずるものです。

そして、この画を目のあたりにして驚かされるのは、たいへん細かな描写です。髪の毛の生え際の一本一本、細かな衣装文様の一つ一つ。布の光沢のような、ものの質感までも表そうとする執拗なまでの描写は、恐るべき筆力によるものです。

華やかな風俗

当時の遊里は、極めて高い教養を必要とする一種の文化サロンで、流行の発信源でもありました。唐輪髻をはじめとする多様な結髪、絞じりや摺箔をふんだんに使った華やかな小袖、南蛮貿易でも

屏風絵というように、彦根屏風が作られた時代の風俗に見立てているのです。



彦根屏風の中には、さらに絵が描かれています（これを「画中画」といいます）。ここに描かれる水墨山水図は、江戸時代のものではなく、室町時代の様式を示しています。また、向かって右から二人目の芭蕉文様の小抽の女性は、謡曲「芭蕉」がモチーフとなっています。近年、彦根屏風に内在する世界を読み解く試みも盛んに行われています。



単に当時の風俗をあらわし

彦根屏風のその後

人々の間の一種あきらめのような空気を反映させているのではないかと、この図ほど人間の深い心理を表現している例はないといつてよいでしょう。



彦根屏風への関心は江戸時代から高かったようです。模写作品や、彦根屏風に想を得た作品が少なからず確認できるからです。多くは、精巧な模本の写しかと思われませんが、中には実物を直接写した可能性が指摘されている作品もあります。彦根屏風は、創作意欲を喚起させる画といえるでしょう。

特に幕末から明治期にかけて多くの作品が確認でき、当時、彦根屏風ブームともいえる現象がおこったので

流行しました。当時は、来世ではなく、今生きている現世に心が集まった時代です。描かれた画題は、洛中洛外図や花下遊楽図、南蛮図など、実に豊富でかつ華やかなものでした。

彦根屏風は、この近世初期風俗図の代表的な作品です。江戸時代の寛永年間（一六二四〜四四）の制作と考えられていて、描かれているのは、当時の京の遊里、六条三筋町のようにすと推定されています。



洗練の極み

この屏風は、背景は一切描かれず、金箔で覆いつくされています。そして、



たらしられて急速に広まった煙草、洋犬のペットも登場します。当時の遊里の教養・遊びとして欠かせない三味線や双六も盛り込まれています。

重層的な世界

画面向って左は「琴棋書画」の見立てとされています。琴棋書画とは、古来中国の知識階級が嗜むべき琴（七絃琴）・囲碁・書・画の四つの技芸のことを指します。日本でも中世からさかんにこの画題の絵が作られました。彦根屏風では、琴を三味線、囲碁を双六、書を艶文（恋文）、画を絵の中に描かれた



ただの画ではなく、伝統的・超越的な要素が随所に組み込まれているのです。

時代を映す表情

登場人物の表情を見ると、どこか虚ろな、倦怠感のようなものが感じられることでしょう。これは、時代の空気をあらわすのではないかと考えられています。



彦根屏風の制作時期とされる寛永年間（一六二四〜四四）は、江戸幕府の支配体制が次第に強化された時期にあたります。この屏風の舞台である遊里も例外ではなく、遊女が主役の歌舞伎が禁止され、京の遊里が洛中から洛外へ移転させられました。

彦根屏風に見る表情は、こうした状況のもと、

はないかと想像されます。

謎の作者



この作品には落款（サインと印）がなく、作者は分かっています。現在、狩野派の絵師という見方が主流です。具体的な名前も挙げられていますが、残念ながら、断定できるには至っていません。狩野派の主流からはずれた老練な絵師とする意見もあります。

これは、見方をかえれば、彦根屏風がそれだけ孤高の存在である証ともいえるでしょう。

